

仙林寺だより

NO. 50
編集・発行
松田正貴

行事報告

秋彼岸会

お盆が過ぎれば、あつという間にお彼岸です。春秋二度のお彼岸は、本来自分を整える修行の期間として設定されたものです。暑さも彼岸まで」の諺もありますように、暑さや寒さから解放され、気が緩むのもこの時期、禅では、身心一如と言いますが、心と身体の緩みは一体と考えます。緩みがちな心身に警笛を与える七日間です。ご先祖様のお墓参りという心の方向性を確かに持たせる事で、気の充実を図る先人の知恵が感じられます。勿論、祈りに依る事で、心身の癒しにも繋がりますものでしょう。仏教の行事にはそれぞれ、ご先祖様からの気使いのメッセージを感じる事が出来るものです。老婆心（老婆親切心）は、受け取る準備のある子孫へ、生前同様の呼びかけがあるものなのでしょう。

小さな美術展

今年の美術展は「畦地梅太郎小品集」でした。五年ほど前に九十六歳で他界されましたが、「山」や「山男」をモチーフに独自の世界を確立された個性ある版画家でした。素朴な画風が持ち味ですが、その中に現代社会に対する矛盾をメッセージとして描き込んでいる感があります。ご覧になった皆さんはどのよう感じたでしょうか。

両祖忌

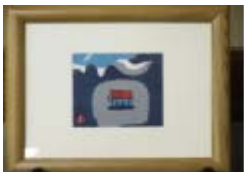
仏教を開かれたお釈迦様を一仏（いちぶつ）そのお釈迦様の教えを正しく受け継がれて下さった方が永平寺のご開山道元禅師様、その教えを広く伝え多くの人々の救済に努められた方が瑩山禅師様です。

道元禅師を高祖、瑩山禅師を太祖、お二人を両祖と呼びします。曹洞宗では先のお釈迦様と合わせて一仏両祖と仰ぎます。ところで両祖忌とは、この両禅師が共に九月二十九日に亡くなられましたので、一緒にご供養申し上げる命日の事です。

達磨忌

十月五日、禅宗の初祖達磨様の「命日」です。張子のダルマ、縁起たるまとして神棚に祀られる事が多くなつた達磨様は、禅宗の僧侶しかも中国における初祖としての存在が本来です。曹洞宗の寺院に参りますと必ず達磨様がお祀りされております。しかもこちらはちゃんと足が付いております。

仏教を保護した皇帝からの「何の功德があるのか」の問いに「無功德」と切り捨てた達磨様、本来のボランティア精神の有り方が見えてくる様な気が致します。



「暑さ忘れて」

「暑さも彼岸まで」との言葉通り、彼岸を過ぎればすっかり秋の気配です。

地球温暖化の影響なのでしょうが、今年の夏は事の他暑さが厳しく、境内の大櫓がつくる木陰の有難さをつくづく感じた事でした。

シヤレではありませんが、まさに木陰のお蔭で暑さがしのげた訳ですが、その暑さが去りますと勝手なもので木陰の有難さを感じた身など何処へやら、今度は朝晩の寒さに「涼しすぎる」と語る始末です。同じように苦しいときに人から受けた恩も楽になるとすっかり忘れてしまう方も少なくないようです。このようにお蔭や恩を忘れてしまう例えとして

「暑さ忘れて陰忘る」また「雨止んで傘忘る」等と諺として戒められます。さてここで、疎ましさの対象として暑さや雨を取り上げ、それを癒す材料として木陰や傘を取り上げていく訳ですが、仏教の考えでは、この疎ましい気象条件を「ご縁」として有難く頂きますようにと、むしろ積極的に受け入れをすすめます。

つまり、暑さもよおすお日さまも、疎ましくさえある長雨も状況が変われば暖かい日差しであり、いのちを潤す恵の雨ともなります。

この様に現在の状況がどうあれ、それぞれの縁でどう変わるか判らないと考えるのが禅的な捉え方でしょう。人の立場であつても同じ事、雇う雇われる、教える教わる、原因に条件が伴うご縁を頂けば、逆転する事もしばしば、今の時代特に身にしみる方も居られます。

「情けは人の為ならず」人に情けをかけるのは結果的に自分の身をもお護りいただけるご縁だったのですね。